

ジェネラリスト・アプローチモデルを活用した教師の生徒指導力の育成

池田 誠 喜*, 竹口 佳 昭**

(キーワード : 生徒指導, ジェネラリスト・アプローチ, 基礎的力)

1. 学校現場における生徒指導の様相

これまで学校現場において生徒指導は問題行動に対処するという文脈で理解されることが多く、このような生徒指導の様相は消極的生徒指導と呼ばれてきた(文部省:生徒指導の手びき, 1965)。文部科学省(2009)が公表している生徒指導関係略年表には、制度の改正や生徒指導に関する通知及び生徒指導の事業などが、当時の学校教育現場の状況に応じた生徒指導上の問題行動への対応となっていることが示されている(表1)。また、平成21年に国立教育政策研究所生徒指導センターが示した、「生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導」第1章の「学校教育と生徒指導上の諸問題」1-(2)「問題行動の増加と生徒指導」において、少年非行が平成16年以降減少傾向ながら依然として高水準であることが示され(図1)、生徒指導の課題として少年非行の推移の変化が真っ先に挙げられている状況を鑑みると、依然として問題行動の対応が生徒指導の大きな関心として捉え

表1 生徒指導関係略年表 (<出典>文部科学省, 2009, 池田が修正)

年度	制度改正・審議会答申等	通知・通達等	事業関係	学校教育の状況	社会の状況
昭和24年	「文部省設置法」制定。 (初等中等教育局の所掌事務として「生徒指導」が規定される。)		文部省、「児童生徒の理解と指導」及び「中学校・高等学校の生徒指導」	【戦後教育の再建期】・教育基本法(昭和22年)・学校教育法(昭和22年)	【戦後復興期】
昭和39年	生徒指導担当の指導主事(充て指導主事)の配置。(90人。生徒指導研究推進校における生徒指導の現場に対して指導力を発揮。)		生徒指導研究推進校を設置。(青少年の不良化が増加したため、生徒の健全育成と非行防止対策として中学校54校、高等学校8校を指定。) 生徒指導研究推進校を設置。(青少年の不良化が増加したため、生徒の健全育成と非行防止対策として中学校54校、高等学校8校を指定。) 生徒指導主事講座を開催。(生徒指導を専門的に担当する教師の養成。) 生徒指導講座を開催。(中・高校の教頭を対象に生徒指導の充実強化を図る。)		・東京オリンピック ・少年非行の第2のピーク
昭和55年		児童生徒の非行防止について」通知。(非行の増加傾向の中、非行の低年齢化、暴走族、中学校による校内暴力事件が問題となる。これに対して、1学校教育活動の適正化、2児童生徒理解と一体となった生徒指導、3関係機関との連携を指導。)	緊急提言を受けて、「児童生徒のいじめの問題に関する指導の充実について」通知。	【高校進学率94%、大学・短大進学率37%】校内暴力頻発、登校拒否増加、養護学校の義務化(昭和54)、40人学級の実現	家庭内暴力の増加
昭和60年		中央教育審議会「時代の変化に対応する初等中等教育の基本的あり方について」答申。 児童生徒の問題行動に関する検討会議が「いじめの問題の解決のための緊急アピール」を提言。 関係省庁から成る非行防止対策推進連絡会議「最近における「いじめ」等青少年の問題行動に関し当面とるべき措置について」申し合わせ。	「いじめ」の問題に関する臨時教育審議会会長談話を発表。これを受けて、文部大臣談話を発表。 「いじめの問題に関する指導の徹底について」通知。(いじめの問題に関する指導の状況に関するチェックポイントを添付。) 「いじめの問題に関する指導状況等に関する調査結果について」通知。(体罰についても含む。)	【高校進学率94%、大学・短大進学率38%】	バブル経済
平成10年	中教審「新しい時代を開く心を育てるために」答申 文部大臣の緊急アピール(ナイフを持ち込まない)	「学校の『抱え込み』から開かれた『連携』へ」 「児童生徒の問題行動への対応のための校内体制の整備等について」通知。	「いじめ・不登校等研修講座の実施」 「心の教室相談員」の配置の開始。	中教審「今後の地方教育行政の在り方について」答申 中等教育学校の制度化 中学生等の殺傷事件	【高校進学率97%、大学・短大進学率48%】 黒磯市女性教諭殺害事件(生徒がバタフライナイフにより殺害)

*鳴門教育大学教職実践力高度化コース

**鳴門教育大学生徒指導支援センター

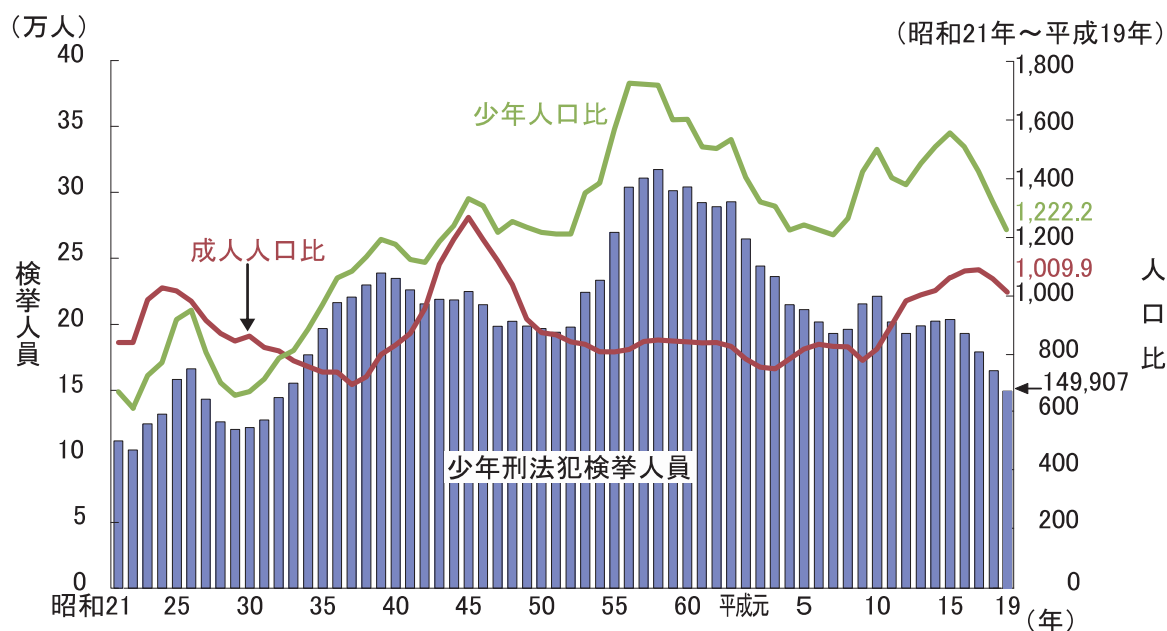


図1 少年刑法犯の検挙人員および人口比（10歳以上20歳未満の少年人口10万人当たりの検挙人員の比率）の推移（＜出典＞生徒指導資料第1集（改訂版）生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導，2009）

られていると考えられる。

一方で、すべての児童生徒それぞれの人格のより良き発達を目指すとともに、学校のすべての活動が児童生徒一人一人にとっての自己実現を援助し、自己存在感を与えるようになることを目指す取り組みが積極的生徒指導として国立教育政策研究所生徒指導センター（2009）などにより示され、これまで消極的生徒指導が中心的な生徒指導の取り組みとされてきた学校現場の中に、積極的生徒指導の認識やその必要性が徐々に広まりつつある。現在では、積極的な生徒指導の展開が児童生徒の問題行動を減らし、望ましい発達を成し遂げるといって学校教育本来の働きの活性化に役立つものとして捉えられることも少なくない。

また、1981年に文部科学省が示した『生徒指導の手引き（改訂版）』の「第1章 生徒指導の意義と課題」において、生徒指導が、「学校の教育目標を達成するための重要な機能の一つであると」と示されて以降、生徒指導は学校教育活動のほとんど総ての活動に機能的にかかわるものとして捉えることが重視され、①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場面を与え自己の可能性の開発を援助すること、の3つの要素をあらゆる教育実践に機能的に活用する必要があることが示された（文部科学省2010）。現在、「生徒指導」は、学校が教育目標を達成するための重要な機能の一つとして捉えられ、児童生徒の人格形成を図る上で大きな役割を担うものとして期待されている。

このような状況下で、生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書として物事の要点・要領を取り出した「生徒指導提要」が平成22年に刊行された。しかしながら、要点を取り出したとはいえ「生徒指導提要」は8章54節から成り、膨大かつ多様であり、生徒指導とは何なのか、その意義や理念が学校現場で提言通り理解されているのか、また、提言に基づいた実践がなされるのかという生徒指導の実際におけるの難しさも感じられる。

2. 生徒指導上の問題行動及び課題の多様性

生徒指導提要（2010）では、第6章のⅡ「個別の課題を抱える児童生徒への指導」において、問題行動の概要説明と対処アプローチを示している（表2）。これらの内容が示す通り、生徒指導における問題行動及び課題は多様であり、その対処方法は一律ではないことが見て取れる。また、2013年に池田が「生徒指導上の悩みごとや困りごと」について、現職教員274人の自由記述をまとめた結果（表3、4）、生徒指導上の課題が20以上のカテゴリーに分類されることとなった。数が少なく分類したカテゴリーに入らない「その他」も21項目あげられ、教師がこれらの課題を一つ一つ詳細に理解し取り組むにはあまりにも膨大かつ多様な状況が示されていた。しかも各々のケースは総てがマニュアル通りの対応で解決することが難しい現状を鑑みると、生徒指導の多様で複雑な内容について一つ一つを取り上げるということが実際的なのかという疑問が生じる。

表2 生徒指導提要における個別の課題を抱える児童生徒の指導の内容（出典：生徒指導提要，2010，池田が修正）

章	節	項						
		①	②	③	④	⑤		
6	生徒指導の進め方 II 個別の課題を抱える児童生徒への指導	1 問題行動の早期発見と効果的な指導	問題行動についての理解	早期発見 特性に応じた児童の基本的な姿勢	効果的な指導の進め方 二次障害の早期発見と予防的対応			
		2 発達に関する課題と対応	障害特性の把握		警察や医療機関などの関係機関との連携	保護者との協働	関係機関との連携	
		3 飲酒、喫煙、薬物乱用	飲酒、喫煙、薬物乱用の現状	飲酒、喫煙、薬物乱用防止に関する指導				
		4 少年非行	少年非行の定義	少年非行の視点	少年非行への対応の基本	親と子、教員と「児童生徒の「絆」の大切さ		
		5 暴力行為	予防に向けた取り組み	対応	保護者地域関係機関との連携			
		6 いじめ	いじめ問題の理解	対応				
		7 インターネット・携帯電話にかかわる課題	必要な知識	違法・有害情報対策	メールに関係するトラブル被害			
		8 性に関する課題	児童生徒の性に関する現状と課題	問題行動や性的被害の防止とその対応				
		9 命の教育と自殺の防止	命の教育の意義	自殺の防止				
		10 児童虐待への対応	児童虐待の定義と、発見・通告・支援制度	学校の虐待対応				
		11 家出	家では非行の始まり	家での原因・背景	家出を防ぐ指導の在り方			
		12 不登校	不登校の定義と「これまでの変遷過程	校内で求められる生徒指導体制の在り方				
		13 中途退学	高等学校中途退学者の現状と課題	中途退学防止に向けての積極的な指導とは	具体的な取組	中途退学者の進路指導の在り方	悩みや病的疾患を抱える生徒	

表3 生徒指導上での悩みごとや困りごと

	校種別												
	男女別			年齢別			校種別						
	全	男	女	30代	40代	50代	幼稚園	小学校	中学校	高校	特別支援学校	その他	
	回答数 (n)	(274)	(78)	(196)	(79)	(97)	(98)	(11)	(110)	(84)	(35)	(31)	(3)
a. 暴力・暴言（生徒間）	6	1	5	1	3	2	1	4	0	1	0	0	0
b. 暴力・暴言・反抗的態度（対教師）	6	3	3	3	1	2	0	1	4	1	0	0	0
c. 喫煙	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
d. 授業妨害（学級崩壊・荒れ・離席）	7	1	6	1	3	3	1	4	2	0	0	0	0
e. 華美な服装・頭髮・化粧	4	2	2	3	1	0	0	0	0	0	4	0	0
f. 窃盗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
g. 不登校・ひきこもり	16	6	10	2	7	7	0	3	9	2	1	1	1
h. いじめ	4	0	4	3	0	1	0	2	1	0	1	0	0
i. 自傷行為	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
j. 行動の問題や問題となるその他の事象	46	22	24	13	17	16	4	19	10	11	1	1	1
k. 生徒指導提要	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
l. 児童生徒理解	20	3	17	6	8	6	0	6	8	3	3	0	0
m. 教育相談	5	0	5	2	0	3	0	2	2	0	1	0	0
n. 生徒指導に関する校内組織と指導方法の共有	21	5	16	7	6	8	0	5	11	2	3	0	0
o. 予防的な学級経営・集団づくり	6	0	6	2	2	2	0	4	1	0	1	0	0
p. 生徒指導に関する法制度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
q. 生徒指導の基礎その他	26	9	17	6	13	7	0	8	11	5	2	0	0
r. 発達障害・特別支援教育	36	7	29	11	16	9	3	15	6	1	10	1	1
s. 虐待	3	1	2	1	0	2	0	2	1	0	0	0	0
t. 保護者家庭の問題と対応及び連携	59	15	44	16	16	27	1	30	17	4	7	0	0
u. 関係機関との連携その他	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
v. 地域との連携	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
w. 様々な問題その他	7	3	4	2	3	2	1	3	1	1	1	0	0

n=274人

表4 表3の様々な問題その他の詳細

	回答数	行動の問題や問題となるその他の事象											生徒指導の基礎・その他					様々な問題				
		事例の多様化と複雑化	コミュニケーションの問題	小高学年女子指導	ITの問題行動に対する対応	不注意・衝動性の問題	無気力・意欲のなさ	生徒間の人間関係構築	規範意識	社会的スキル能力の弱まり	自主性・自発性の乏しさ	言葉遣い・あいさつ	生徒指導に対する考えの違い	生徒指導方法	教師の人間性や教育観の問題	教師と子どもの関係構築	過大な仕事量や内容の実際と疲労感	外国からの子どもたちへの対応	教師自身の学びや相談に関すること	異校種の移動時の教師の対応	異校種との連携	地域との連携
全	(83)	3	9	2	7	2	4	7	5	1	1	4	7	5	2	7	8	1	4	1	2	1
<男女別>																						
男	(40)	2	5	0	3	1	3	3	3	1	1	2	5	1	0	3	3	0	2	1	1	0
女	(43)	1	4	2	4	1	1	4	2	0	0	2	2	4	2	4	5	1	2	0	1	1
<年代別>																						
30代	(23)	0	2	2	2	1	0	4	1	0	0	0	4	1	0	1	2	0	3	0	0	0
40代	(24)	2	5	0	3	1	3	1	2	0	0	1	1	2	2	2	5	1	1	0	2	0
50代	(26)	1	2	0	2	0	1	2	2	1	1	3	2	2	0	4	1	0	0	1	0	1
<校種別>																						
幼稚園	(5)	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
小学校	(30)	2	1	2	3	0	0	4	2	1	1	3	2	2	1	0	3	0	2	0	0	1
中学校	(24)	1	3	0	1	0	1	1	2	0	0	0	2	2	1	4	4	0	2	0	0	0
高校	(19)	0	3	0	2	1	3	2	1	0	0	0	2	1	0	3	0	0	0	0	1	0
特別支援学校	(4)	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0
その他	(1)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

全回答数=83

3. 教師に求められる生徒指導の力

このような多様な問題への対応及び課題に対して求められている教師の力量とは何であろうか。まず、現職教員を対象として検討する。このことについて、文部科学省が2011年に生徒指導に関して教職員に求められる力量を示している。第一として、生徒指導を進めるための基盤能力として、信頼関係を構築する能力、ニーズを特定する能力をあげ、具体的な方法として、コミュニケーション技法やカウンセリング技法などが基本となることに加え、学校内外でチームとして活動する姿勢と能力が述べられている。第二として、一般教員に求められる基礎的な力量について、学級での生徒指導や教科における生徒指導を毎日の学級で実践できること、そのためには児童生徒理解の理論や方法に基づき子供の状態や課題を的確に理解し、個別支援計画を立てた上での適切な支援を実行できることが示されている。第三として、基礎的な力量を踏まえた中核教員に求められる力量として、一般教員に求められる基礎的な力量をしっかり身につけ、さらに応用力を増すこと、経験を経験だけで終わらせずに研鑽を積んで現場で有効な力量へと変えていく努力が示されている。三つの提言をまとめると、個別支援における信頼関係を構築する能力と児童生徒を理解する能力、さらにチームとして支援する能力、集団の特質を活かしその中で自己指導能力を育成する教師の能力に集約されるものと思われる。

上記の報告から示唆された生徒指導に求められる力量は、教師が生徒指導力を向上させるための方向性を示すものとして貴重な報告である。しかし、そのための方法はカウンセリング技法などに委ねて示され、資質・能力なのかアプローチや介入方法なのか、取り組むための意欲や姿勢なのか判別しにくく、生徒指導上の悩みごと

に示された多様な問題に対するための能力や方法が必ずしも明示されているとは言えない。上述した文部科学省報告（2011）にある、「それぞれの教職員に求められる生徒指導の力量を身に付けるための研修内容は、膨大になるものと考えられたため、研修の高めるための環境づくりなど求められる力量を身に付ける仕掛けについても検討することにより、研修内容をできる限り簡素なものとするよう努めた。」という言葉が示す通り、生徒指導に汎用的に活用できる基本的な力となるものを作り出す必要が生じているのではないだろうか。

次に、教員養成における生徒指導力について検討する。池田が2013年に全国39大学の教員養成学部で行われている教員養成の生徒指導に係る授業科目152講座について、シラバスで扱った内容を集計した（表5）。加えて、小中学校の教育課程に含まれる内容で分類したものについてグラフにまとめた（図2）。

結果から、生徒指導に係る授業内容は教育相談に関する内容が多くなっていることが明らかになった。合わせてキャリアガイダンスも生徒指導の授業で扱われていることが確認された。これらの内容は、先に示した教員の基礎的な力量における、児童生徒理解や信頼関係の構築、自己指導能力に深く関連するものとして扱われていると解釈することができる。この点では、授業設定としては学校現場との乖離は少ないとみることができるが、この項目の多さを考慮すると、大学の教員養成にあたり生徒指導に関する力の育成方法は改めて検討する必要があるのではないだろうか。

表5 教員養成大学学部授業科目（生徒指導）のシラバスで扱った内容の集計

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
生徒指導に関する内容（定義、内容、方法）	教育相談に関する内容（定義、内容、方法）	進路指導に関する内容（定義、内容、方法）	道徳教育に関する内容（定義、内容、方法）	特別活動に関する内容（定義、内容、方法）	キャリア教育（定義、内容、方法）	カウンセリング概論	教育相談基礎知識	進路指導の実践	特別支援教育	教育心理学	学校心理学	生徒指導の変遷	発達論	不適応行動概論	不登校	ひきこもり	いじめ	非社会的行動	虐待	反社会的行動／非行概論	子どもの貧困	暴力 校内暴力	学級崩壊	発達障害	精神症状	学習に関わる問題	基本的生活習慣	児童生徒理解	児童生徒の心と体の理解	アセスメント	ストレス	保護者及び家庭支援・対応・協力	学校経営	関係機関及び関係者との連携	生徒指導体制 教育相談システム	人間関係づくり	教育課題（問題行動）の理解	事例検討	SST	SST	リーダーシップ論	懲戒体罰	集団指導	法との関係	予防的法的取り組み	びあサポート	対人関係	危機対応	規範意識	養護／少年院等の施設
73	98	49	4	4	39	84	68	9	45	3	7	10	44	27	72	11	72	14	20	34	2	13	7	29	14	12	4	47	27	12	9	22	23	44	18	1	38	6	9	11	2	12	9	5	16	2	6	7	3	1

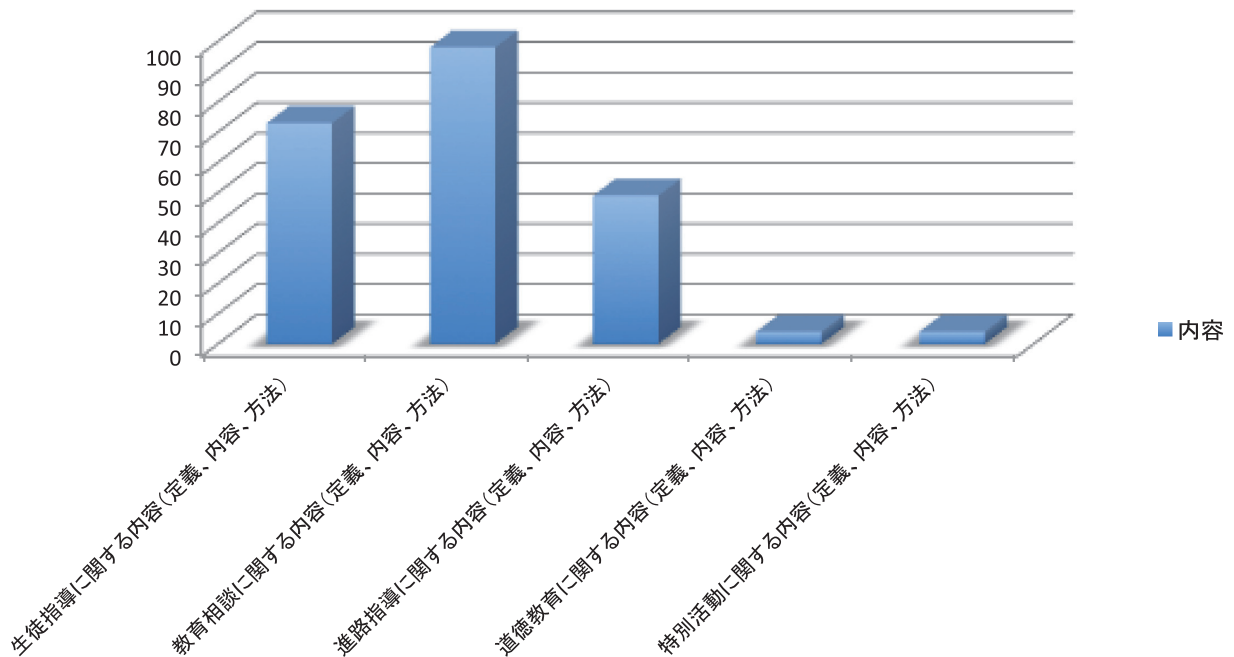


図2 生徒指導に関する学部設定科目の内容

4. 生徒指導の多様なアプローチ

多様化・複雑化する生徒指導の現状に対して、近年、様々な分野領域の取り組みを取り入れながら、生徒指導の新しいアプローチとして実際に活用されているものがある。日本生徒指導学会により公刊された『現代生徒指導論』(2015)において八並(2015)は、生徒指導を目的や対象によって3つのタイプに分類している。第一は、成長を促す指導で、これまで開発的生徒指導と呼ばれてきたものである。第二は予防的な指導である。これは予防的生徒指導と呼ばれてきたものである。第三は課題解決の指導であり、治療的生徒指導や消極的生徒指導と呼ばれてきたものである。このアプローチモデルは、問題の行動程度、対象が集団か個人かによって、3階層の生徒指導が明示されることにより、生徒指導体制としてバランスが保たれるよう強調しているところに特徴がみられる。

次に、包括的・全校的生徒指導を取り上げる。包括的・全校的生徒指導の視点は、生徒指導を機能として捉え、生徒指導に求められる取り組みが総ての教育活動で行われることを示唆したものである。したがって、各教科、道徳教育、総合的な学習の時間、特別活動、キャリア教育、給食、清掃などあらゆる機会に展開されることが期待され、その理念や方法は膨大かつ多岐にわたっている。同時に教科指導の留意点として取り組む内容なのか、生徒指導の機能として抑えるべきなのか重複する面もあり、その異同について混乱することも考えられる。

第三のアプローチは、栗原(2015)の構想するマルチレベルアプローチである。マルチレベルアプローチはコミュニティ心理学の3つの予防モデルや学校心理学の3つの心理援助サービスモデルを基に、より学校の生徒指導の実際に近づけて、3水準の生徒指導モデルを提示した。1次的生徒指導とは、「自分でできる力を育てる生徒指導」とし、2次的生徒指導は「友達同士で支え合う力を育てる生徒指導」とし、3次的生徒指導は「先生や専門家が中心となって支える生徒指導」である。栗原(2015)は、このアプローチを展開するために必要な教師の力量を研修内容で示すことによって明らかにしている。第1領域を「セルフマネジメント」とし、教師が①自己理解②セルフマネジメント力を自らの力として育成することである。第2領域は「個別支援・個別支援領域」とし、③個別アセスメント④個別支援力の育成が掲げられている。第3領域は「集団作り・学級作り」で、⑤集団アセスメント力⑥学級経営力の育成を目的としている。第4領域は「校内マネジメント領域」とし、⑦カリキュラムマネジメント力⑧組織運営力⑨チーム支援力が目標となっている。第5領域は「外部連携領域」とし、⑩コーディネーション力の育成が目標である。第6領域は「生徒指導の構想と推進領域」とし、⑪現状分析力、⑫学校組織運営力である。

以上、生徒指導への取り組みとして報告されているものについて、現代生徒指導論(2015)を参考に一部を紹介した。これらの内容からは、生徒指導のアプローチの内容理解やそれらを実行するための力は、課題の多様化とともに複雑化かつ細分化されて捉えられるようになっており、掲げられている生徒指導のための基本的な力は、応用力をも兼ね備え、かつ総ての課題に対してスペシャルな対応力として示される傾向が見られる。このような傾向が実際の教員養成及び現職教員の力量形成及び人材育成に役立つのか疑問が生じる場所である。むしろ生徒指導力を支える汎用性のある基本的な力を育成することで、主体的・発展的に生徒指導の力をつけるモデルを構築することが実際的ではないだろうか。

そこで、本稿では、様々な生徒指導上の課題に有機的に対応するための基礎的な力となるものを提案し、その活用効果について展望することを試みる。特に、現在でも多くの学校で問題行動の対応と予防に関する直接的な援助に関わり苦慮している現状が見られるため、問題行動への対処に対する基本的な力となるアプローチを提示しその可能性について展望することとする。

5. 生徒指導に求められる汎用性のある基礎的な力

現在、学校教育において多様化かつ複雑化する課題や問題への対応のために求められる教師の生徒指導力は、課題の多様性に対応するためのジェネラリスティックな力が求められている。加えて、個別の課題を抱える児童生徒の家庭の背景、発達、パーソナリティ、対人関係、学習上の課題など様々な影響因の関連を考える必要があり、家族支援や環境調整を視野に入れたアプローチを実践する力も求められている。

このようなことから、現在の生徒指導においては、個々の異なる対応を統合するジェネラリストとしての能力が求められると同時に、生徒指導の課題に対応するジェネラリストについての人材育成が求められることが考えられる。ここでは、いくつかの職業領域における人材育成を含めたジェネラリストに関する状況を示し、生徒指

導に求められるジェネラリストとしての能力について明らかにしていくことを試みる。

第一として、ジェネラリストの育成を日本でも先駆的に実施している看護職領域の状況を紹介する。近年、看護領域ではジェネラリストとしての看護師育成の必要性が言われている。津本ら（2008）は、病院で働く看護師が臨床の場におけるキャリアアップを考えた場合に大きく二つの方向性が考えられると述べている。一つの方向性とは、特定の専門あるいは看護分野にかかわらず、どのような対象者に対しても経験と継続教育によって習得した多くの暗黙知に基づいたもので、その場に応じた知識・技術・能力を発揮できるジェネラリストを目指す方向である。もう一つの方向性は、特定の専門あるいは看護分野で卓越した実践能力を有し、継続的に研鑽を積み重ね、その職務を果たし、その影響が患者個人にとどまらず、他の看護職や医療従事者にも及ぶ存在であり、期待される役割の中で特定分野における専門性を発揮し、成果を出すスペシャリストのことである。また、津本ら（2008）は、ジェネラリストは、もともと長期雇用形態のもと組織内で通用する人材を育てるため、ローテーションにより多くの領域の経験を積み、その組織に特有の知識や技術を幅広く習得させるという雇用上の背景が存在したが、現在ではスペシャリストとの役割が分化されたことにより、ジェネラリストの意義が大きくなってきていることも述べている。

第二として、学校教師に対するジェネラリストの視点について述べる。紅林ら（2012）が実施した、保護者・教師・子どもを対象とした「理想の教師に関する人々の意識を明らかにする」研究調査結果より、保護者、教師ともに「教師には様々な資質が必要である」と考えており、全人的なジェネラリストを教師の理想としている傾向があることを示された。また、西谷（2014）は、子どもの問題行動の原因が複雑になっているために教師の役割が多岐に渡りさらに高度な専門知識を有することが必要となっている現状から、教師は学校への様々なニーズや多岐にわたる職務にしっかり対応できるようにスペシャリストとしての役割が求められていることを指摘している。したがって、教師にはジェネラリストとしての力とともに高度な知識や技術が必要とされるスペシャリストの側面の両方が要求されている状況であると考えられよう。

第三として、生徒指導にも関わりの深い社会福祉領域における援助活動について述べる。社会福祉領域で活動する人材は一般にソーシャルワーカーと呼ばれ、幅広い援助活動が求められている。そのために直接的援助と間接的援助の二つの援助を同時に包括的に実施することのできる援助者をジェネラリスト・ソーシャルワーカーとして育成してきた。ジェネラリスト・ソーシャルワーカーと呼ばれる人材の行う援助がジェネラリスト・アプローチである。一方、ジェネラリストが展開するジェネラルな視点に基づく援助方法をジェネラル・ソーシャルワークと呼んでいる。その異同について述べる論も存在するが、ここでは、ジェネラル・ソーシャルワークとジェネラリスト・アプローチをほぼ同義として論を進めることとする。

副田（2008）は、ジェネラリスト・アプローチがジェネラリスト・ソーシャルワーカー養成の概念枠組としてアメリカで発展してきたもので、あらゆる種類の問題・ニーズ・またあらゆる実践の場に対しても応用可能な、問題・ニーズを全体的（包括的）にとらえる視点と、多面的な援助内容を柔軟に計画・実施していける能力・融通性・想像力をもったソーシャルワーカーを養成するための認識および実践の枠組であることを示している。他方で、ジェネラリスト・アプローチがグローバルな視野で錯綜した生活や環境をとらえる時代の養成が生み出した包括・総合的な発想であり、その方法を具体化する視点があることを持つことが太田ら（1999）により指摘されている。

このように、社会福祉領域では、多面的な援助活動を柔軟に実践するための基礎的能力としてジェネラリスト・アプローチを捉えているとともに、加えて人材育成として以前から取り組んできた実績がある。

以上、看護・学校教育・社会福祉の三つの領域でのジェネラリストに関する状況を示した。中でも、学校教育でこれまで望まれてきたジェネラリスト像では、生徒指導のニーズに対する理解、対応方法に対して、高度な専門性を持って総てに当たるといことが求められている。これは実際上難しいことであり、実現させるためには極めて多忙かつ困難な状況を生み出しかねない。一方、社会福祉領域で扱ってきたジェネラリスト・アプローチの視点は、包括的かつ総合的な発想が求められている点に教師が求められているジェネラリストとの違いがある。すなわちジェネラリスト・アプローチは、すべての課題の一つ一つスペシャルに関わるのではなく、問題状況を包括的にとらえ、解決のための方法や技術をその場に応じて調べ選択し活用しようとする姿勢や意志を含んだ、汎用性のある基礎的な力と理解することができる。現在の学校現場における生徒指導の課題の多様性と困難さを考えると、教師に求められる生徒指導の力として、社会福祉領域で実践されているジェネラリスト・アプローチの視点が役立つものと期待できる。

そこで、これ以降、生徒指導のための教師の基本的な力としてジェネラリスト・アプローチを想定し、生徒指

導の課題に対応する汎用的な基本的力としてどのようなことが期待され、課題となるか展望することとする。

6. ジェネラリスト・アプローチ

神山（2006）によると、2001年のWHO総会で採択された、ICF（International Classification of Functioning, Disability and Health）により、障害をマイナス面だけで捉えるのではなく、生活機能というプラス面からもみる視点が加えられ、従来の心身機能偏重でなく、利用者を全人的にみて、自己決定や主体的参加を尊重する支援の在り方が重視されるようになった。同時に相談支援に関わるソーシャルワークも従来の専門分化した方法論ではなく、利用者を中心に生活全体を見て、その方法論の統合化による支援を行うジェネラリスト・ソーシャルワークが注目されるようになったことが示されている。

副田（2008）は、ジェネラリスト・アプローチを、「クライアントと環境との関係を総合的に、かつ、多面的に把握することで問題状況を包括的にアセスメントに、することにより、どのような方法技術や実践アプローチをどの点において活用すればよいか、援助の青写真を提示する」ものとして捉えている。また、副田（2008）は、ジェネラリスト・アプローチがシステム論と生態学モデルに基づいていることを指摘し、援助においてミクロレベル（個人と家族）、マクロレベル（地域）を想定、直接援助と間接援助の相補的な取り組みの必要性を述べている。ジェノグラムやエコマップの活用は、システム論的視点を持つことを可能にするとともに、実際の介入のためのプラン作成において重要な示唆を与えるものとなる。副田（2008）はジェネラリスト・アプローチの実践例として、①問題状況の把握、②アセスメント、③プランニング、④プラン実施、⑤モニタリング、⑥評価の6点を示している（表6）。

以上が社会福祉領域におけるジェネラリスト・アプローチの概要である。

表6 ジェネラリスト・アプローチの基本的特性

ジェネラリスト・アプローチの基本的特性
(1)問題状況の把握：生態学的・システムの視座
(2)アセスメント：人間と環境に対するエコシステムの視点
(3)目的：問題・課題の解決、対処能力の獲得・潜在能力の活用・開発、成長
(4)対象：（ミクロ、メゾ、エクソ、マクロ）すべてのシステムが援助対象
(5)プラン：状況に応じた種々の実践モデルやアプローチを適切に組み合わせて使用
(6)プラン実施：援助は一貫した展開過程を通して実践され、各局面においての共同
(7)モニタリング：直接的な実践とともに自らの実践を調査・評価、振り返り

7. 生徒指導におけるジェネラリスト・アプローチの構想

社会福祉領域におけるジェネラリスト・アプローチを参考に生徒指導に役立つモデルを構想するにあたり、次の点について留意した。第一に、すべての課題に一つ一つスペシャルに関わるのではなく、問題状況を包括的にとらえ、解決のための方法や技術をその場に応じて調べ選択し活用しようとする姿勢や意志を含んだ、汎用性のある基礎的な力。第二に、生態学及びシステム論に基づき、問題や課題について、個人のみならず、個人を取り巻く家族・友人・学級・学校・学校外活動・地域を対象の環境調整を検討する。第三に児童生徒の持っている強さ、アクセス可能な制度やシステムを用いる、の3点である。表7にこの留意点を基に継続的にアプローチの具体を示した。

8. 生徒指導におけるジェネラリスト・アプローチの学校教育への適用に関する展望

これまで生徒指導の人材育成や力量形成の方向性は、生徒指導の多様で複雑かつ膨大な対応方法や内容理解と実際上の対応スキルなどスペシャルな力を総ての面で求めるといった人材育成モデルで進められてきたと言える。その際、基本的な構えとして生徒指導の3つの機能として知られる、自己存在感、共感的人間関係、自己決定に留意することで自己指導能力の育成が期待されることが示されてきた。

しかしながら、課題や問題を抱える児童生徒に対しては、3つの基本的な構えに加えて、より具体的な援助方法に対するニーズが生まれている。そのニーズに応えるものとして、ジェネラリスト・アプローチは、総ての課題に対して同じ視点と手順が示されていることによって、援助開始時における場当たりの対応が無くなるとともに、プランの作成時にはより有効な手立てを選択しようとする柔軟性を持ち合わせた対応が期待できる。ある課題に対して、具体的なプランが決まっていなかったことは、新任教師や不慣れたケースにおいては不安が生じるかもしれないが、ジェネラリスト・アプローチにおいては、より効果的な方法を探る姿勢を持つこと自体が方法論として示されているため、不安な状態にとどまっているのではなく、積極的なプランづくりのための研究や調査、検討が主体的に実行されることが期待できる。

また、生態学・システム論的視点を有することによって、問題や課題を個人や集団を取り巻く環境との関係から広く捉えることができることである。これまでの生徒指導は個人の背景にある家庭環境に考えを廻らせ、学校でどのように対応するかという直接的援助の姿勢が強かったが、ジェネラリスト・アプローチは家庭環境を含む個人を取り巻く環境への介入や調整を躊躇しない姿勢と間接的な援助の視野を持ち合わせている。もちろん安全性を考慮した援助が求められるのは同じであるが、ともすれば、家庭や保護者、制度などのために踏みとどまっていたこれまでの生徒指導に、積極的に環境調整に係る視点を提供するものとして意味あるものになるであろう。

生徒指導の力を検討する上で以上のことを鑑みると、教師の研修と教員養成を含んだ人材育成において、ジェネラリスト・アプローチの実践過程の理論と方法をしっかり身に付けることにより、主体的に様々なケースに合わせた方法を選択することが可能になることが期待される。ジェネラリスト・アプローチは、スペシャルな力を総ての面で持ち合わせることが期待される教師を育成するためのベースとなる力になることが期待できる。

今後は、実際の生徒指導力の形成に向けて、ジェネラリスト・アプローチの育成モデルを具体的に構築し、検証することが求められる。

表7 生徒指導におけるジェネラリスト・アプローチの特性

生徒指導ジェネラリスト・アプローチの基本的特性

- (1)問題状況の把握：生態学的・システムの視座
 - (2)アセスメント：人間と環境に対するエコシステムの視点・個人のパーソナリティ・学級学校適応・人間関係・家族状況と本人との関係
 - (3)目的：問題・課題の解決、対処能力の獲得・潜在能力の活用・開発、成長
 - (4)対象：（マイクロ、メゾ、エクソ、マクロ）すべてのシステムが援助対象
 - (5)プラン：状況に応じた種々の実践モデルやアプローチを適切に組み合わせて使用・環境と個人との調整・アドボケイトマクロシステムへの介入（家族支援、地域支援等）
 - (6)プラン実施：援助は一貫した展開過程を通して実践され、学校内でのチーム援助体制・ストレングスの視点
 - (7)モニタリング：直接的な実践とともに自らの実践を調査・評価、振り返り
-

文 献

- 神山裕美 2006 ストレngths視点によるジェネラリスト・ソーシャルワーク - 地域生活支援に向けた視点と
枠組み-山梨県立大学 人間福祉部紀要 pp.1-10
- 栗原慎二 2015 生徒指導研究とこれからの研修のあり方 日本生徒指導学会(編)現代生徒指導論 学事出版
pp.183-185
- 紅林伸幸 中村瑛仁 井上剛男 長谷川哲也 2012 子供環境としての教師:その資質能力の基本構造 -小学
生・保護者・教師を対象とした質問紙調査から- 滋賀大学教育学部紀要 教育科学 No.62 pp.163-173
国立教育政策研究所生徒指導センター 2009生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導 生徒指導資料集
(改訂版)
- 文部省 生徒指導の手びき 1965
- 文部省 1981 生徒指導の手引き(改訂版)
- 文部科学省 2009 生徒指導関係略年表
- 文部科学省 2010 生徒指導提要
- 文部科学省 2011 生徒指導に関する教員研修のあり方
- 西谷 寿 2014 学校の様々な問題についての一考察 -子供の健全な発達を促す指導方法を探りながら- 教
育と哲学 愛知教育大学哲学会 62. pp.13-22
- 太田義弘 秋山 二 1999 ジェネラル・ソーシャルワーク 光生館
- 副田あけ美 2008社会福祉援助技術論 -ジェネラリスト・アプローチの視点から- 誠信書房
- 津本優子・長田京子・樽井恵美子・小野田舞・内田宏美 看護師のキャリア・ニーズの実態 -医療施設の検
討- 島根大学医学部紀要 2008 第31巻 pp.23-35
- 八並光俊 生徒指導の構造的理解 日本生徒指導学会(編)現代生徒指導論 学事出版2015 pp.48-55

Development of the ability of the school guidance utilizing generalist approach model

IKEDA Seiki* and TAKEGUCHI Yoshiaki**

(Keywords : school guidance, generalist approach, teacher's basic ability)

This study is those prospects for its effect by presenting a teaching model involving school guidance.

In this paper, referring to the generalist approach that is practiced in the company flag welfare region, it showed a model underlying forces with versatile to accommodate the challenges of school guidance.

Generalist approach for school guidance, rather than a specific methodology, it is possible to indicate the position for the corresponding and basic procedures and central perspective, be selected considering proactively countermeasures promising.

Central perspective, ecology, and incorporates a system theory is to adjust the individual and the environment.

As future prospects, it is necessary to verify the validity of the generalist approach model.

*Advanced Educational Practitioner, Naruto University of Education

**Center for School Support of Guidance and Counseling, Naruto University of Education